

# COSMOS集



「あすなる集」特選

やばい 伊藤 祐楓\*茨城

チクチクのこのころのとげを除けてゆく毛抜のごとき百円アイス  
よつばらいはそのままソファで寝てしまえ柔い夜風に包まれながら  
筑波嶺に一保堂の茶すすりつつ今日は老舗を是とすることに  
みなの川探しにゆかん筑波嶺の朝霧はれて吾子の起きれば  
マスクして湯に入らんとした日にはやつぱりやばい世界がやばい

雨音の容れもの 工藤 亜希子\*東京

京都市きの車内ガラ空き隣席におめかし姿のロボホン坐らす  
鴨川沿いの結婚式場 感無量の二人の向こうジョガーが走る  
知識なければ名人戦の記事を読む棋士らの選ぶおやつ楽しく  
ひんやりと頬杖つけば雨音の容れものとなる私のからだ  
懊悩も悲哀も宿すわが頭ゴゴゴと洗うオートシャンプー

夫の木椅子 印出 美由紀 神奈川

鋭き羽に飛ぶ鳥らを思はする若冲の「松」アメリカゆ来る

手にそつと方位磁石をわたされてその針揺らくほどのぬくもり  
七歳のひき算チエックする午後の部屋にかすかに風が通れる  
夫の坐さぬ夫の木椅子に来る風は遠くまだ見ぬ富良野の風か  
湯を浴めば出入り口なき摩周湖がわが身のうちにぐらり揺れたり

月の客 白木 佳乃\*青森

木霊する郭公の声携帯の着信音に呼応している

虹の弧はつかまり立ちの姿してコロナ対策作戦会議

満ち欠けを見守りながら過ぐす夜世界人類はみな月の客

手つかずのコップの水に夏の空黙っていても雲動いてる

日没のオレンジ色の時のなかステンドグラスに映る大正

東京ノ、歌会 前中 映東京

咲く前に食はれてしまふ菜の花の Pasta に黄の粉チーズ振る  
十五日かけて覚えし力士の名ふた月たてばおほかた忘る

「COS」の煙を淡く吐きながら男が戻りゆくダゲアウト

わくちんヲ、打ツタ人ヨリ、東京ノ、歌会ハ始メトイテクダサレ

獅子唐が辛かったといふクレームを聞きつつ昼の天井を食ふ

風の音 吉田 真弓 北海道

山鳩の鳴き交はす声響きたりホウホウほほう一羽は見えず

お醤油を入れたきところを我慢する離乳食は素材の味で

山と海つなげて空がある話朝のドラマにパンプの歌声

曇り日にしーんと聞こゆる風の音楽擦れではなくただ風の音

彩雲と呼べる雲のあるらしき一度は見たし空に浮かぶ彩

今日の波 松浦一郎 山口

昨日からの雨が上がれば初夏はつなつの装ひとなる広場のみどり  
死者はもう憎まれ口をたたかないたまに会ひたし写真の祖母に  
白崎へ海を見に行く今日の日は今日の波あり波止に砕ける  
朝とれし透きとほるやうな夏のきす腹を開ければ小さき卵巢  
蝶たちは思はぬ風に低く舞ひシロツメクサの群落となる

偉丈夫となれ 籠田くみよ 和歌山

やはらかき風の包める春の日はモネの絵のごと日傘の散歩  
日盛りも暗きリビングに忽然と夫の静物画光を放つ  
この年も花をつけずにクレマチス鉄線として日々伸びてゆく  
ヒーローの剣をかざす我が孫よ弱きを守る偉丈夫となれ  
赤人が詠みし片男波今まさに干潟となりて鳥が降り立つ

梅雨空なれど 義原富喜子 鹿児島

奇縁なり中学までの幼友五十年を経て歌友となりて  
戦争を知らぬわれにも迫り来る坂本冬美の〈岸壁の母〉  
採りたての胡瓜どつさり持ちくるる友の額の汗はまぶしも  
植ゑ替へしバナナ、パイナップルにたつぷりと水遣りしたり梅雨空なれど  
東ひがしに向きて咲ける向日葵のダイナミックな花の大きさ

三次 盆地 樋口八重美\*広島

スパーと病院が閉じられ人気なき三次みよしの通りを犬つれ歩く  
にわとりと池のこい締めにぎやかに料理を作りき昭和の祭り  
たけのこを頂きふきをさし上げてメロンが届くわらしべ長者

新緑の三次盆地に響きゆくホオジロの声ウグイスの声  
もう一度此の味つけ食べたくて何度もためす夕餉の肉じゃが

水路を走る 水辺あお静岡

炎天下ただ一筋の涼として水が水押し水路を走る  
人見知りせぬわが猫が近づかず話題少なき客との距離を  
定年後どこにも行かず誰も来ず着たきり男衣更へせり  
〈君が代〉と〈国歌〉の違ひ思ふ人思はぬ人とともに起立す  
紙切れといへど怖ろし赤紙も借用証書も投票用紙も

天然アロマ 青木淳子鳥取

二百枚の笹の葉洗ふキッチンに天然アロマの香りたちたり  
留守の子の家よりゴトゴト音がする忠犬のごとく働くヘルンバ  
「てっぺんが咲けば梅雨明けするんだよ」立葵の花ぼつかり開く  
甘がらいちりめんじやこ煮は義母の味思ひ出しつつ作る今宵は  
マスクかけ日ごと変身するやうに一年が過ぎゴムひもゆるむ

吾はマイマイ 太田いずみ\*兵庫

雨障つづみゴロナ障をあじさいの葉陰に詠う吾はマイマイ  
三匹の老い棲む家居七十に入りたる夫婦と猫十一歳  
アトリエに北窓からのひかり射し愁いの面のトルソーの隣  
星条旗模様のマスクを外すとき俄幼し笑窪の青年  
初もの黄色い西瓜を三角に尖らせまらずは味見の一口

合掌をせり 斎藤嶺也北海道

ハグしてもはるかとかぬ左右の手名札つけむと杜の蝦夷松

しとどふる春の時雨ならうれしけど桜打つ雨雪へとかはる  
ジシユクとふことばのバリアー張られをり動物園のゴリラは偉し

癌ならば見舞ふことも多からんコロナとなれば冷たき視線  
背のびして空を掴むとチューリップ日暮となれば合掌をせり

甘櫛の丘 友田昌子\*奈良

「七年をかけて育てたササユリです」甘櫛の丘にガイドする友  
白杖の友と甘櫛の丘に立つ目に見えるらし青き三山

弟の乗る田植機よロボットのごと回転し早苗植えゆく  
間引き菜を採りいる夫の間水にほどよく冷えしはつさく寒天  
白あんはいちこの襦袢、白玉の着物を着たるいちご大福

思ひ沈めて 加々良節子 佐賀

スマホにて知りたる一つ紫のハナダイコンは「諸葛菜」のこと  
コンバインを載せたるトラクックゆるゆると従はせゆくバスとバイクを  
目の前の伸びる麦の穂愛であたる親しき人は突然逝きぬ  
押し車押しゆく老女二人連れ追ひ越すか否われは従きゆく  
春の陽に湖面は輝る代々の田畑、屋敷の思ひ沈めて

緑の風 間城佐代 高知

重たげに頭を垂るるあぢさゐに降り続く雨の深き水色  
姫女苑の群れ咲く土手の風のなかをさなのわれが走り抜けゆく  
早苗田に映る夕陽の静けさやゆるり流れる六時の時報  
梅雨晴れの緑の風は干し物の隅から隅まで通り抜けたり  
ガラス戸に遮られたる穴蜂の羽音朝より休まず聞こゆ  
南天の花ほろほろと散る朝の庭に迷子の蟬の幼虫

天平の民 中西きく子 東京

ふるさとの井戸端浮かぶ街路樹のかけに一輪鬼灯の花  
副反応なきを祈りて解熱剤、パジャマの替へを枕辺に置く  
赤銅色の月蝕見むと寄る窓を占むるいちまい鈍色の空  
ひたすらに仏にすがる他なけむ疫病に悶えし天平の民  
軒先にレースのドイリーゆらゆらり雨にさらされ蜘蛛の巣光る

抗体生れし 重永栄子 福岡

ワクチン接種熱の上がれば実感すこの老体にも抗体生れしを  
朝刊を取る手に若葉風そよぎ避暑地のごとし梅雨の晴れ間は  
いま暫し梅雨の晴れ間の六月をまさな空の下に居りたし  
成人の日娘が植ゑし小さき梅 葉陰に実の見ゆ四十年を経て  
この年は大活躍の大谷選手素振りのしぐさに少年の日思ふ

氈鹿となる 山本竜作\*新潟

うららかに照りては曇る春の日に鶯の声山にひびかう  
春の陽を浴びつつ山に分け入りて独活採りおれば彼方に媼  
バラの棘触れば痛いワクチンの注射が痛いコロナ恐ろし  
心の棘すべて抜かんと新緑の山へ分けいり氈鹿となる  
庭鉢に噴水かければ虹がたつわが心にも虹淡くたて

寥しい鏡 鳥夏樹\*宮城

うらかな昼をゆっくりゆったりと徘徊したい下駄箱の下駄  
小鳥たちが枝選るように子供たちはこの世の親を選べないのだ  
夏夕焼けのおわったあとの名残りです淡くてあかい水彩画です

はつ秋のおとなう風をありありと映すからだは寥しい鏡  
秋空のおおひというの底なしをひとりたのしむ鈍行の雲

五割主婦 渡辺京子 宮崎

国富の平野に水張田現れて瑞穂の国の田植ゑはじまる

昔から「六月生まれの勤なし子」と言ひたり田植ゑの時季のお産は  
「ワクチンは年齢順に接種」とある回覧板を急いで廻す  
わが病は左手首に集まりてぼつぼつぼと種火燃えをり  
痛みなき右手のご機嫌うかがひて食器を洗ふ五割主婦なり

空を眺める 深井フミコ 富山

日中の暑さをさけて少しづつ畑作りて夏野菜植ゑる



「その二集」特選

グラナダ 清水美里\*東京

焼鳥を串から外すやつらなど滅べとかいう悪口は好き

寝る前に食べてたソフトクリームの香りを纏い眠る子静か

口紅に見える机上の印鑑が 心療内科の先生美人

グラナダで買った絵皿に初鱈光ってこれが「TAPON」の初夏よ

鉛筆が短くなっていく速さ新一年生の筆箱の

日ざしさせ野菜に日よけをかけてやる朝水かけて早く根づけと  
トマト苗に桃太郎トマト二つつきよくがんばつたと声かけに行く  
カンパニユラ紫の花色やさしくて水たつぷりとすひ上げてをり  
庭掃きて山茶花杉の木切り揃へ明るくなりし空を眺める

キュートな紳士 中村 京兵庫

投手打者いづれの所作も素晴らしく大谷君はキュートな紳士  
野草の十字花はもカラカラと軒にかわきて十葉となる

どくだみの葉つばはハートかスピードか小二にとへば「くさい」と逃げる  
ワクチンを打ちたる宵のけだるさは糊の利かない浴衣着るやう  
隙間なく水面にソーラーパネル置く池よおまへは苦しくないか  
浅緑のメタセコイヤの円錐がとなりの町とのさかひのしるし

台湾パイイン 富永恵美子\*東京

エコバッグのちようど安定する重さじつくり選んだ台湾パイイン  
寡黙なる豆腐屋店主のツイッターまめに更新じつは猫好き

開けたまま或いは閉める人もいて梅雨の車窓はどれも正しい

うっせえわ言われる立場になる前に私も言いたいうっせえわって

折り紙でいうならわたし手順三 折り目にしたがいコップにならん

螺 鈿 細 工 江 崎 玲 子 \* 福 岡

スパーの監視カメラに見下ろさる管巢のツバメ見上げる我は  
みたらしに紫陽花あまたに浮かびおりその鮮やかさに心洗わる  
正倉院螺鈿紫檀五弦琵琶復元を観る匠の技を

古文書に休暇願を見つたり肺病の母見舞うためとか  
夜光貝無骨な殻の内側を磨きて輝く螺鈿細工は

父 の 日 高 橋 みどり \* 愛 知

「我慢したけれど手首を切りたい」と泣く女生徒がハサミを隠す  
二年後にはここにはいないわたくしが「今後のため」の会議催す  
片付けたデスクに貼りぬ「もう今日は帰宅しました電池切れです」  
読みさしのペーパーバックを伏せ置きて車窓に探すはつなつの富士  
短夜にまた夢を見る 六年も前に拙く訣れたひとの  
わたしには死別の不在娘には離別の不在 きょうは父の日

虫 の 事 情 川 越 三紀子 \* 宮 崎

遠ざかる「さくらさくら」の声の主探せば赤いランドセル三つ  
稲の株みるみる育ち水面隠し驚の脚さえ隠してしまふ

知らぬ間にジャンパーに付いて来た蟻をあわてて払う病院の椅子  
ドクダミの根方で右往左往する虫にもそれぞれ事情はあらん  
木の下のおおいドクダミ抜き居れば衣服も指も香の纏いつく  
葉のかげの指先ほどのおおい実はずんと尖つてもうレモン形

削 る 柴 田 有 里 \* 愛 知

空の青夕日の茜宵の紺水張る稲田折り紙となる

繰り返す「痛い、いたい」と義母の声今夜も削る私の寝る間  
削られた睡眠時間補填なくブラック介護の日々は続いて  
デイへ行く義母見送つてやれやれと罪悪感のない我が居る  
こんもりと手の内に成るサブリ山介護のために倒れぬように

心 の 何 か 成 田 裕 子 \* 青 森

芍薬がこくこくと風に頷けば亡き父母の声ふいに聞こえる  
スベリヒユスギナカタバミホトケノザ名乗らぬうちについと抜かれぬ  
ぼろぼろと玉ねぎこぼれるハンバーグそこが手作りなんて言い訳  
薔薇の木の下伸びやかに雑草の広がる広がる自由気ままに  
雑草を抜いてるよう本当は心の何かを抜いてる時間

朝 読 書 佐 藤 彩 湖 \* 新 潟

中庭で魚が跳ねた 朝読書全校四百七十五人  
九十と九十七の相談は百歳に着的着物の話  
木々の葉が森を被いてしまうまでの日差し集めて咲く二輪草  
のしのしと文字書くようなゼンマイを見つけて嬉し山に遊ぶ日  
砂浜に裏返されるボートらの舳先の向こうのすぐそこは夏

卵 を 割 る 牧 島 幸 造 鹿 見 島

このスマホヒトが作りし物なれどトリセツなしではわが手に負へず  
見渡せばいつも何かの花があるわが徳之島白百合の季  
食卓の主役が今朝は入れ替はりシャキシャキタケノコ味噌汁にある  
たつぷりと餌遣りしつつか鶏たちと語らひあそぶ休日朝  
産みだての温い卵を割るときは瞬間「罪」の意識がよぎる

三度三度のごはん 山下啓 子\*香川

練習があるかと問えば「オフだよ」と大人ぶりたる八歳が言う  
エコバッグ二つ軽々運ぶ娘を車のキー持ち小走りに追う  
家人みな在宅すればあれこれと悩みぬ三度三度のごはん

山道をカーブの先が見えぬまま戻るも出来ずつき進みゆく  
口紅を買ってきたまま仕舞い込み出番の来ないコロナ二年目

音のない森 福島 健太郎 神奈川

高台の中天わたる白き月いつしか街は音のない森  
放置されし空家の洩らす溜息と聞き紛ふまで庭木のさやぐ  
晩年の明日を思ひて夕暮れに平凡な解ひとつが残る

マンネリを更新しつつ十年をただ過ごしをり廊下の帽子  
坂道を終末に向け下りてゆくこれでなかなかテクニクが要る

真鍮の包丁 藤田 邦彦\*東京

舟のむこう姉さん被りの偉丈夫は旧友にして豆腐屋である  
豆腐沈む舟をはさんで赤い手に小銭落として豆腐受け取る



真鍮の包丁清し水のなか白い豆腐を切り分けている  
水のなか少し傾げた板離れ豆腐斜めに沈みゆくかな  
昼寝する村静かなり豆腐屋の少年ひとり店番をする

尺取虫 大久保 伸 子\*兵庫

おのれより大きな羽虫を引きずりて右に左に蟻はよろつく  
播州弁時々混じる子のメール家を離れて二十六年

梅取りに疲れし夜の眠られず夜明け間近のうぐいすの声  
畠より来し尺取虫は律義にもわがキッチンを広さを測る

さざ波や渦つくりつつトラクター雨ふる中を代掻きをする

ぐみの実 柴崎 昭代 新潟

初夏の畑で野菜の苗植ゑる去年より増やす「オクラ」六本  
一雨がくれば野菜は背を伸ばすきうり一本初物を採る

ぐみの木にぐみの実生れど子らは来ぬうぐひすまでもみな集まるに  
隣家のぐみの実赤くたわわなり小鳥と風が枝を揺らせり

身体中が欲してゐるよな心地して梅干し一個ごはんにのせる

蜥蜴の子 池川 紀江 愛媛

厨房の窓より見ゆる梅雨の空きざむ青紫蘇香をはなちをり  
今日も雨梅雨前線停滞しダム放流のサイレン響く

蜥蜴の子身をくねらせて迂り込む日影に茂る葺草のなか  
押し入れの黄はむアルバム捲るうち片付け忘れはや夕餉どき  
時計草風に揺れゐる巻きひげをそつと格子にからませておく